

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）

金屋光彦

いじめ考 その4

—大人のいじめ—

1 いじめの字と大人のいじめ

いじめを漢字で書くと、「虐め」となる。この「虐」の字は、虎が爪をむき出して弱いものを襲う形の意だという。自らは安全な立場にいて、自分より弱く無力な者をいたぶりもてあそぶ、時には死に追いやるいじめ…。人として品性に欠けた、卑劣な行為ともいえるこのいじめは、どこの国でもどこの場所でも、人が集うところであれば、影のように忍び寄ってくるものである。

子どもの世界は、大人社会の縮図といわれて久しい。前回、正義に乗ったいじめのケースをあげたが、力のアンバランスを背景に、加害者側にいじめの自覚に欠けるいじめは、大人の世界でも数限りない。組織内でのパワハラをはじめ、家庭内でのドメスティックバイオレンス、しつけと称して繰り返される子への虐待、さらに地域社会で行われる村八分等、立場の強い虎たる者たちが放ついじめは、大人の世界にも満ち溢れている。

全国の労働局に寄せられるセクハラ関連の相談は、毎年1万件にものぼるといふ。「非正規労働者など弱い立場の人が増え、そうした地位の差を背景にしたセクシュアル・ハラスメントが続いているのではないか」（牟田和恵 大阪大学教授談 読売新聞2016年4月7日）

2 指導や訓練の名の下でのいじめ

セクハラばかりでない。いわゆる会社や上司によるパワー・ハラスメントによる破綻も、後を絶たない。2014年度精神障害に関わる労災認定数と自殺者数が、過去最高だったことは、それを如実に示唆している。

2015年12月、長い歳月を経てようやく和解に至ったある労災事件がある。2008年の4月、希望を胸に一人の女性が名古屋から上京した。有名な外食企業に採用され横須賀市内の店舗に配属された彼女は、思いとは異なり、過酷な労働を強いられる。

過労死ラインは、月の時間外労働（残業）が80～100時間といわれる。ところが、彼女の時間外労働は141時間にもものぼった。そればかりでなく、休日には創業者の著書を読んで感想を書く作業や、理念集の暗記まで強要された。

疲弊しきった彼女は適応障害を発症し、手帳にこう記した。「体が痛いです。体が辛いです。気持ちが沈みます。早く動けません。どうか助けて下さい。誰か助けて下さい」

そうしてわずか入社2カ月後のある日、彼女は自ら命を絶つのである。参議院議員にもなった創業者は、よう

やく7年の歳月の後、会社側の過失を認め、謝罪し、あわせて1億3,400万円を支払うことを受け入れたのだった。

彼女は人と接するのが好きで、この会社を選んだという。母親は、「娘は真面目で優しい性格だった。助けられなかった後悔は死ぬまで続く」と、言葉を詰まらせながら語った。

また、2012年6月、埼玉県機動隊プールで、水難救助訓練中、当時26歳の隊員が死亡した。彼は、河川や湖の事故や災害に対応する水難救助部隊に所属していた。基本的な泳ぎ方や潜水訓練のほか、現場で冷静に行動できるよう指導者が水中に沈めて負荷をかける「妨害」という訓練が行われていたという。

この時彼は、膝のけがで不調を訴えていた。当該訓練中、苦しさには耐えかねた彼は、はしごをつかんで泳ぎをやめる。それを見た上司は、戒めとして彼の肩を蹴って水中に戻し、身体を背後からつかんで、繰り返し水中に沈めたという。その結果、彼は溺れて水死した。

過失致死罪に問われた上司は、裁判で、「厳しく訓練する必要があった」と述べた。しかし、全国で機動隊の潜水技術を指導する専門家は、「あり得ない。危険きわまりない」と証言している。

3 いじめの傾向と乗り越える意味

このように、働く組織内で、指導や訓練という名の下で、卑劣ないじめが今も行われている。自由と民主主義になじみ、人権意識も広がっている現代社会で、このようなことが今だに顕在すること自体、驚きともいえる。

いじめは人間関係の病である。受けるほうは多大な苦痛を感じるが、加害側はそれを知らず容赦もしない傾向が、強まっているともいわれる。

振り返れば、いじめだったといえるものは、私の人生でも多数あった。それに折れそうになりながらも、支え助けてくれる人もいて、何とか乗り越えて今日がある。いじめで死に追い込まれた人は、まことに無念で痛ましい限りだが、私たちはみな繋がっている。ひどく苦痛ないじめだが、解決策は必ずあるのだと思う。

教育現場でも必ず起こるいじめ。望まれるのは、いじめを通して、加害者も被害者もそれを乗り越え、成長していくことだ。何といても、彼らはまだ発達途上の人間で、共感能力も、レジリエンスの力も、まだ十分育っているとはいえないからである。